桃太郎

楠山正雄

一

むかし、むかし、あるところに、おじいさんとおばあさんがありました。まいにち、おじいさんは山へしば刈(か)りに、おばあさんは川へ洗濯(せんたく)に行きました。

ある日、おばあさんが、川のそばで、せっせと洗濯(せんたく)をしていますと、川上(かわかみ)から、大きな桃(もも)が一つ、

「ドンブラコッコ、スッコッコ。
ドンブラコッコ、スッコッコ。」

と流(なが)れて来(き)ました。

「おやおや、これはみごとな桃(もも)だこと。おじいさんへ

のおみやげに、どれどれ、うちへ持って帰りましょう。」

おばあさんは、そう言いながら、腰をかがめて桃を取ろうとしましたが、遠くって手がとどきません。おばあさんはそこで、

「あっちの水は、かあらいぞ。
こっちの水は、ああまいぞ。
かあらい水は、よけて来い。
ああまい水に、よって来い。

と歌いながら、手をたたきました。すると桃はまた、

「ドンブラコッコ、スッコッコ。
ドンブラコッコ、スッコッコ。」

といいながら、おばあさんの前へ流れて来ました。

おばあさんはにこにこしながら、

「早くおじいさんと二人で分けて食べましょう。」

と言って、桃をひろい上げて、洗濯物といっしょにたらいの中に入れて、えっちら、おっちら、かかえておうちへ帰りました。

夕方になってやっと、おじいさんは山からしばを背負って帰って来ました。

「おばあさん、今帰ったよ。」

「おや、おじいさん、おかいんなさい。待っていましたよ。さあ、早くお上がんなさい。いいものを上げま

すから。」
「それはありがたいな。何だね、そのいいものというのは。」
こういいながら、おじいさんはわらじをぬいで、上に上がりました。その間に、おばあさんは戸棚の中からさっきの桃を重そうにかかえて来て、
「ほら、ごらんなさいこの桃を。」
と言いました。
「ほほう、これはこれは。どこからこんなみごとな桃を買って来た。」
「いいえ、買って来たのではありません。今日川で

拾って来たのですよ。」

「え、なに、川で拾って来た。それはいよいよめずらしい。」

こうおじいさんは言いながら、桃を両手にのせて、ためつ、すがめつ、ながめていますと、だしぬけに、桃はぽんと中から二つに割れて、

「おぎゃあ、おぎゃあ。」

と勇ましいうぶ声を上げながら、かわいらしい赤さんが元気よくとび出しました。

「おやおや、まあ。」

おじいさんも、おばあさんも、びっくりして、二人

いっしょに声を立てました。

「まあまあ、わたしたちが、へいぜい、どうかして子供が一人ほしい、ほしいと言っていたものだから、きっと神さまがこの子をさずけて下さったにちがいない。」

おじいさんも、おばあさんも、うれしがって、こう言いました。

そこであわてておじいさんがお湯をわかすやら、おばあさんがむつきをそろえるやら、大さわぎをして、赤さんを抱き上げて、うぶ湯をつかわせました。するといきなり、

「うん。」

と言いながら、赤さんは抱いているおばあさんの手をはねのけました。

「おやおや、何という元気のいい子だろう。」

おじいさんとおばあさんは、こう言って顔を見合わせながら、「あッは、あッは。」とおもしろそうに笑いました。

そして桃の中から生まれた子だというので、この子に桃太郎という名をつけました。

二

おじいさんとおばあさんは、それはそれはだいじにして桃太郎を育てました。桃太郎はだんだん成長するにつれて、あたりまえの子供にくらべては、ずっと体も大きいし、力がばかに強くって、すもうをとっても近所の村じゅうで、かなうものは一人もないくらいでしたが、そのくせ気だてはごくやさしくって、おじいさんとおばあさんによく孝行をしました。

桃太郎は十五になりました。

もうそのじぶんには、日本の国中で、桃太郎ほど強いものはないようになりました。桃太郎はどこか外国

へ出かけて、腕いっぱい、力だめしをしてみたくなりました。

するとそのころ、ほうぼう外国の島々をめぐって帰って来た人があって、いろいろめずらしい、ふしぎなお話をした末に、

「もう何年も何年も船をこいで行くと、遠い遠い海のはてに、鬼が島という所がある。悪い鬼どもが、いかめしいくろがねのお城の中に住んで、ほうぼうの国からかすめ取った貴い宝物を守っている。」

と言いました。

桃太郎はこの話をきくと、その鬼が島へ行ってみ

たくって、もう居ても立ってもいられなくなりました。
そこでうちへ帰るとさっそく、おじいさんの前へ出て、
「どうぞ、わたくしにしばらくおひまを下さい。」
と言いました。
おじいさんはびっくりして、
「お前どこへ行くのだ。」
と聞きました。
「鬼が島へ鬼せいばつに行こうと思います。」
と桃太郎はこたえました。
「ほう、それはいさましいことだ。じゃあ行っておいで。」

とおじいさんは言いました。

「まあ、そんな遠方へ行くのでは、さぞおなかがおすきだろう。よしよし、おべんとうをこしらえて上げましょう。」

とおばあさんも言いました。

そこで、おじいさんとおばあさんは、お庭のまん中に、えんやら、えんやら、大きな臼を持ち出して、おじいさんがきねを取ると、おばあさんはこねどりをして、

「ぺんたらこっこ、ぺんたらこっこ。ぺんたらこっこ、ぺんたらこっこ。」

と、おべんとうのきびだんごをつきはじめました。

きびだんごがうまそうにでき上(あ)がると、桃太郎(ももたろう)のしたくもすっかりでき上(あ)がりました。

桃太郎(ももたろう)はお侍(さむらい)の着(き)るような陣羽織(じんばおり)を着(き)て、刀(かたな)を腰(こし)にさして、きびだんごの袋(ふくろ)をぶら下(さ)げました。そして桃(もも)の絵(え)のかいてある軍扇(ぐんせん)を手に持(も)って、

「ではおとうさん、おかあさん、行ってまいります。」

と言(い)って、ていねいに頭(あたま)を下(さ)げました。

「じゃあ、りっぱに鬼(おに)を退治(たいじ)してくるがいい。」

とおじいさんは言(い)いました。

「気(き)をつけて、けがをしないようにおしよ。」

とおばあさんも言いました。

「なに、大丈夫です、日本一のきびだんごを持っているから。」と桃太郎は言って、

「では、ごきげんよう。」

と元気な声をのこして、出ていきました。おじいさんとおばあさんは、門の外に立って、いつまでも、いつまでも見送っていました。

三

桃太郎はずんずん行きますと、大きな山の上に来ま

した。すると、草むらの中から、「ワン、ワン。」と声をかけながら、犬が一ぴきかけて来ました。

桃太郎がふり返ると、犬はていねいに、おじぎをして、

「桃太郎さん、桃太郎さん、どちらへおいでになります。」

とたずねました。

「鬼が島へ、鬼せいばつに行くのだ。」

「お腰に下げたものは、何でございます。」

「日本一のきびだんごさ。」

「一つ下さい、お供しましょう。」

「よし、よし、やるから、ついて来い。」

犬はきびだんごを一つもらって、桃太郎のあとから、ついて行きました。

山を下りてしばらく行くと、こんどは森の中にはいりました。すると木の上から、「キャッ、キャッ。」とさけびながら、猿が一ぴき、かけ下りて来ました。

桃太郎がふり返ると、猿はていねいに、おじぎをして、

「桃太郎さん、桃太郎さん、どちらへおいでになります。」

とたずねました。

「鬼が島へ鬼せいばつに行くのだ。」

「お腰に下げたものは、何でございます。」

「日本一のきびだんごさ。」

「一つ下さい、お供しましょう。」

「よし、よし、やるから、ついて来い。」

猿もきびだんごを一つもらって、あとからついて行きました。

山を下りて、森をぬけて、こんどはひろい野原へ出ました。すると空の上で、「ケン、ケン。」と鳴く声がして、きじが一羽とんで来ました。

桃太郎がふり返ると、きじはていねいに、おじぎを

して、

「桃太郎さん、桃太郎さん、どちらへおいでになります。」

とたずねました。

「鬼が島へ鬼せいばつに行くのだ。」

「お腰に下げたものは、何でございます。」

「日本一のきびだんごさ。」

「一つ下さい、お供しましょう。」

「よし、よし、やるから、ついて来い。」

きじもきびだんごを一つもらって、桃太郎のあとからついて行きました。

犬と、猿と、きじと、これで三にんまで、いい家来ができたので、桃太郎はいよいよ勇み立って、またずんずん進んで行きますと、やがてひろい海ばたに出ました。

そこには、ちょうどいいぐあいに、船が一そうつないでありました。

桃太郎と、三にんの家来は、さっそく、この船に乗り込みました。

「わたくしは、漕ぎ手になりましょう。」

こう言って、犬は船をこぎ出しました。

「わたくしは、かじ取りになりましょう。」

こう言って、猿がかじに座りました。

「わたくしは物見をつとめましょう。」

こう言って、きじがへさきに立ちました。

うららかないいお天気で、まっ青な海の上には、波一つ立ちませんでした。稲妻が走るようだといおうか、矢を射るようだといおうか、目のまわるような速さで船は走って行きました。ほんの一時間も走ったと思うころ、へさきに立って向こうをながめていたきじが、

「あれ、あれ、島が。」とさけびながら、ぱたぱたと高い羽音をさせて、空にとび上がったと思うと、スウッとまっすぐに風を切って、飛んでいきました。

　桃太郎（ももたろう）もすぐきじの立（た）ったあとから向（む）こうを見（み）ますと、なるほど、遠（とお）い遠（とお）い海（うみ）のはてに、ぼんやり雲（くも）のような薄（うす）ぐろいものが見（み）えました。船（ふね）の進（すす）むにしたがって、雲（くも）のように見（み）えていたものが、だんだんはっきりと島（しま）の形（かたち）になって、あらわれてきました。

「ああ、見（み）える、見（み）える、鬼（おに）が島（しま）が見（み）える。」

　桃太郎（ももたろう）がこういうと、犬（いぬ）も、猿（さる）も、声（こえ）をそろえて、

「万歳（ばんざい）、万歳（ばんざい）。」とさけびました。

　見（み）る見（み）る鬼（おに）が島（しま）が近（ちか）くなって、もう硬（かた）い岩（いわ）で畳（たた）んだ鬼（おに）のお城（しろ）が見（み）えました。いかめしいくろがねの門（もん）の前（まえ）に見（み）はりをしている鬼（おに）の兵隊（へいたい）のすがたも見（み）えました。

そのお城のいちばん高い屋根の上に、きじがとまって、こちらを見ていました。

こうして何年も、何年もこいで行かなければならないという鬼が島へ、ほんの目をつぶっている間に来たのです。

四

桃太郎は、犬と猿をしたがえて、船からひらりと陸の上にとび上がりました。

見はりをしていた鬼の兵隊は、その見なれないすが

たを見ると、びっくりして、あわてて門の中に逃げ込んで、くろがねの門を固くしめてしまいました。その時犬は門の前に立って、

「日本の桃太郎さんが、お前たちをせいばいにおいでになったのだぞ。あけろ、あけろ。」

とどなりながら、ドン、ドン、扉をたたきました。

鬼はその声を聞くと、ふるえ上がって、よけい一生懸命に、中から押さえていました。

するときじが屋根の上からとび下りてきて、門を押さえている鬼どもの目をつつきまわりましたから、鬼はへいこうして逃げ出しました。その間に、猿がする

すると高い岩壁をよじ登っていって、ぞうさなく門を中からあけました。

「わあッ。」とときの声を上げて、桃太郎の主従が、いさましくお城の中に攻め込んでいきますと、鬼の大将も大ぜいの家来を引き連れて、一人一人、太い鉄の棒をふりまわしながら、「おう、おう。」とさけんで、向かってきました。

けれども、体が大きいばっかりで、いくじのない鬼どもは、さんざんきじに目をつつかれた上に、こんどは犬に向こうずねをくいつかれたといっては、痛い、痛いと逃げまわり、猿に顔を引っかかれたといっては、

おいおい泣き出して、鉄の棒も何もほうり出して、降参してしまいました。

おしまいまでがまんして、たたかっていた鬼の大将も、とうとう桃太郎に組みふせられてしまいました。桃太郎は大きな鬼の背中に、馬乗りにまたがって、

「どうだ、これでも降参しないか。」

といって、ぎゅうぎゅう、ぎゅうぎゅう、押さえつけました。

鬼の大将は、桃太郎の大力で首をしめられて、もう苦しくってたまりませんから、大つぶの涙をぼろぼ

ろこぼしながら、

「降参します、降参します。命だけはお助け下さい。その代わりに宝物をのこらずさし上げます。」

こう言って、ゆるしてもらいました。鬼の大将は約束のとおり、お城から、かくれみのに、かくれ笠、うちでの小づちに如意宝珠、そのほかさんごだの、たいまいだの、るりだの、世界でいちばん貴い宝物を山のように車に積んで出しました。

桃太郎はたくさんの宝物をのこらず積んで、三にんの家来といっしょに、また船に乗りました。帰りは行きよりもまた一そう船の走るのが速くって、間もな

く日本の国に着きました。
船が陸に着きますと、宝物をいっぱい積んだ車を、犬が先に立って引き出しました。きじが綱を引いて、猿があとを押しました。
「えんやらさ、えんやらさ。」
三にんは重そうに、かけ声をかけかけ進んでいきました。
うちではおじいさんと、おばあさんが、かわるがわる、
「もう桃太郎が帰りそうなものだが。」
と言い言い、首をのばして待っていました。そこへ

桃太郎が三にんのりっぱな家来に、ぶんどりの宝物を引かせて、さもとくいらしい様子をして帰って来ましたので、おじいさんもおばあさんも、目も鼻もなくして喜びました。

「えらいぞ、えらいぞ、それこそ日本一だ。」

とおじいさんは言いました。

「まあ、まあ、けががなくって、何よりさ。」

とおばあさんは言いました。

桃太郎は、その時犬と猿ときじの方を向いてこう言いました。

「どうだ。鬼せいばつはおもしろかったなあ。」

犬(いぬ)はワン、ワンとうれしそうにほえながら、前足(まえあし)で立(た)ちました。

猿(さる)はキャッ、キャッと笑(わら)いながら、白(しろ)い歯(は)をむき出(だ)しました。

きじはケン、ケンと鳴(な)きながら、くるくると宙返(ちゅうがえ)りをしました。

空(そら)は青々(あおあお)と晴(は)れ上(あ)がって、お庭(にわ)には桜(さくら)の花(はな)が咲(さ)き乱(みだ)れていました。

底本：「日本の神話と十大昔話」講談社学術文庫、講談社
　１９８３（昭和58）年５月10日第１刷発行
　１９９２（平成４）年４月20日第14刷発行
※「そのお城のいちばん高い」「こうして何年も」の行頭が下がっていないのは底本のままです。
入力：鈴木厚司
校正：大久保ゆう
２００３年８月27日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。